



研修 — その論理、技法、モラル

東日本国際大学 明 珍 昭 次

本年5月30日、文部省の「教員の長期派遣研修に関する調査研究協力者会議」は、中間まとめを公表した。このまとめは、「教員の大多数は学校制度の中で教育を受けたあと、学校以外の社会で経験を積むことなく子どもに教えていく」事実を問題点として指摘する。そのうえで、教員の視野を広げるため、学校外の民間企業や社会福祉施設などで1ヶ月ないし1年の長期社会体験研修を積み、その研修成果を学校教育に還元すべきだ、と提言している。

研修は、辞書的には「学問や技芸をみがきおさめる現職教育」と定義される。この研修は、校内研修から始まって、地域単位のものから県レベル、全国規模のものまである。さらに、海外研修まで用意されている。そしてまた、研修内容は、教科授業、学級・学校経営、児童・生徒の生活指導など、さまざまなジャンルのものがある。上記中間まとめは、研修のジャンルをさらに広げ多様化しようとしている。学校の教師には、他のいかなる職業にもまして研修の網がかぶせられている。

一方、学校現場における教師の仕事量は極めて過重である。勤務時間内に教材研究をすませることができず、研究が家庭に持ち込まれることもしばしば。超過勤務の中での校内研修は形骸化し空洞化せざるを得ない、という内部告発も相次いでいる。行政サイドがこのような現実から教師を開放する努力は、今や不可避かつ喫

緊のものとなっている。

とはいえ、教師の研修そのものの存在理由は、厳としてゆるぎないものである。ここにあらためて、教職研修の論理・技法・モラルについて考えておきたい。

1 研修の論理（なぜ研修なのか）

人間は、自分の意思次第でこれにもなれるしあれにもなれる、こうもできるしあもやれる、といった存在可能性を生きている。人間の前には、同じ状況のもとでも、選択可能な幾つかの行動のコースがある。人間は、そのようなコースの1つを自分の意思で選択し行動する。人間の自由とは、このような異なった行動の選択可能性、選択の主体的任意性のことである。行動の幾つかの可能性の中から1つを選択することによって、その人間の存在の仕方が決まる。教師は誰しもが、自分の自由な意思にもとづいて自分の在り方・生き方を選択した。大学を卒業するとき、教師だけが唯一の生きる道であったわけではない。選択肢は幾つかあったけれども、教職が選択されたのだ。いま自分が教師であること——この事実は、子どもと共に生き、未来を担う子どもを育てることにおのれの生命をかける、という人間の在り方・生き方を自分の意思で選択した結果にはかならない。これは、厳粛な選択である。「大人社会ではうまく生きていく自信はないが、子ども相手なら何とか」といった不謹慎な選択ではない。裁判官や検事